

## BOOK REVIEW

カスティリオーネの庭

中野美代子 著 文藝春秋

ロンドンの郊外、キュー・ガーデンには18世紀末、ウィリアム・チェンバースの建てた中国風のパゴダが今も聳えたっています。中国趣味シノワズリの象徴といわれるこの塔パゴダ、確かに遠目から見るとよく絵や写真で見えるような典型的な中国の街中の塔の姿をしている気がしますが、近づいてみると壁も屋根も煉瓦で覆われた、紛うことなき西洋建築なのです。村松伸氏の言葉を借りれば、『西洋古典建築のプロポーションに、「ステレオタイプ」化された斗拱や欄干、棧唐戸、デフォルメされた屋根、これこそシノワズリの作法であり、すべてはここに始まる』（加藤 三編「アジアの都市と建築」鹿島出版会）、ということになります。

さて、このパゴダを含むキュー・ガーデンの中国庭園の意匠は、チェンバース自身の広東での見聞以外に、当時北京に滞在したフランス人宣教師ジャン・ドニ・アッティレの書簡が英訳で出版されたものに依拠している、といわれています。アッティレらイエズス会の宣教師たちは、北京で布教を許されるかわりに宮廷画家として乾隆帝に伺候していました。そして彼らがヨーロッパから持ちこんだ書物や銅版画に描かれた庭園の図から、西洋楼と噴水を備えた西洋庭園が中国に生まれているのです。中国趣味シノワズリの出発点といわれるキュー・ガーデンのパゴダが建てられる数十年前のことです。アッティレは中国名を王致誠といい、彼とともに北京郊外の円明園内に長春園と呼ばれる西洋楼庭園を造ったのがイタリア人宣教師、郎世寧ことジュゼッペ・カスティリオーネでした。

皇帝、皇三子永璋、カスティリオーネをめぐる奇妙な三角関係のうえに、ポッツォのだまし絵トロンプ・ルイユやエステ荘の噴水オルガン、南海の珍獣といった異国の幻影が絵画や庭園として結晶してゆくさまを描いたこの小説は、伝道の先端や権力の頂点といった世界の臨界点に否応なしにたたされた者へのオマージュを多分に含んでいます。

イギリスにおける中国趣味シノワズリが時のプリンス・オブ・ウェールズに捧げられたのと同様に、中国における西洋趣味も乾隆帝という一人の皇帝の権力の象徴として生まれた——しかしその原動力はある個人の独創によるものではなく、庭園の設計者であるカスティリオーネと、帝国の支配者である乾隆帝の幻想と現実の摩擦といったやむにやまれぬ事情の中からしか出てこられなかったような気がします。

「庭園の世界史」の著者ジャック・ブノア＝メシヤンのいう「庭の帝国主義」がもしあるとすれば、それはすべてこの小説の中の乾隆帝のように異国へのあこがれよりもその力に対する執着と恐怖に由来するのかもしれませんが。そしてそうであるとしたら、我々の庭に求める癒しの力の源も少々考え直さなくてはなりません。「何々風の庭」という異国趣味の心地よさの原点はどのような個人の庭であれ、常にこの権力の、異界との相克から始まっているのですから…。